

一、二本松市の歴史

縄文時代から、二本松地方には人々が住み、集落を営んでいたことが、安達太良山麓から発見された堅穴式住居跡（原瀬上原遺跡・塩沢上原遺跡）から知ることができます。

五世紀頃には、東北地方に陸奥国がおかれ、六世紀になると、陸奥国が信夫・阿尺・石背・白河・会津の五郡に分けられたと伝えられています。また「延喜式」によると、延喜六年（九〇六年）には安積郡が二つに分けられ、安積郡と安達郡になつたことがしるされています。このことは、郡山台遺跡（二本松市杉田）の発掘調査からも、安達郡の郡役所「郡衛」^{くんが}が置かれていたこと、米を蓄える倉庫群（正倉）が配置されていたことがわかります。

十一世紀に入ると、源義家父子が安倍氏を討った歴史があり、八幡太郎義家に関する伝説も多く語り継がれています。

十二世紀には、源氏と平氏が相争つた時代ですが、この時源頼朝を助け、鎌倉幕府の創立に貢献し西安達郡（二本松地方）の領地を賜つたのが武州足立郡の足立氏^{ぶじゅうあだちぐん あだちし}であり、同音により、足立を安達に改めたともいわれています。

南北朝の時代（一三四〇年）になると、東北地方に奥州探題をおいて鎌倉府を牽制しようということから、両朝の武士達が入り乱れて戦いに明け暮れるようになりました。その頃、足利尊氏の一族で学問武芸ともにすぐれた名将畠山高国が、北朝（尊氏）から奥州管領に任せられ、二本松地方を治めることになりました。田地ヶ岡（殿地ヶ岡ともいう、現在の塩沢小学校のある小高い丘）に館を築きました。また同時に、北朝から吉良貞家も奥州管領に任せられ、北朝＝足利方の奥州支配の体制が整いました。しかしその後、足利尊氏・直義兄弟の不仲の影響をうけて、奥州管領の二人も対立し、觀応二年（一三五一年）二月、畠山高国とその子国氏は、吉良氏によって自刃におひこされました。国氏の子国詮はかろうじて脱出し、安達太良山の奥にひそんだのち安達郡二本松におちつき、白旗ヶ峯（今の霞ヶ城の頂上）に城を移し、二本松城（霧ヶ城）と称しました。畠山氏は二本松城主として、十一代にわたり二本松を支配しました。隣国では当時伊達氏が自分の領地を広げようど、畠山氏に何度も戦いをしか